

〈発生〉論の地平から

齊藤英喜

自らの研究活動にもとづいた「回顧と展望」といわれても、ほんの駆け出しのチンピラにすぎぬ自分に、回顧するほどの過去があるはずもないし、まして未来を展望しようといった余裕など持ちあわせていない。しかし、この〈現在〉への問いかけだけはあつた。現在の自分自身の位置を問うこと、つまり、なぜお前の現在は、「古代文学研究」なのかという問い。自分にとっては、「回顧と展望」ではなく、〈現在〉の自分がなぜこうなのかということの「総括と確認」である。

たしかに自分にとって「古代文学研究」は、自らの、どうしても手離すわけにはいかぬある切実な課題を追うことで至りついた場所だといえる。が、そんな自覚的な事ではなくある日ふっと気づいてみたら、「古代文学研究」などというところでもないところにいる、という云い方のほうがびったりくる気もする。たぶん、その二つのうちちょうど中間ぐらいのところがほんとうなのだろう。しかし、ともかく自分にとって「古代文学研究」とは、あらかじめ、はじめから自明の存在としてあつたわけではない、ということではたしかだ。『古事記』や『万葉集』や『源氏物語』やといった古典文学としての作品が、まず現に存在し、それを前提とすることで研究がなりたつという具合にはなかつた、といいかえてもよい。こういう自分の

位置は、〈発生〉論というモチーフとおそらくパラレルな関係にある。もろもろの古典作品の存在以前、つまり文学作品として書かれた言葉以前の機構から、なぜ、どのようにして〈書く〉ことは発生するのか、という問題だ。といっても、それは「古代文学史」の第一頁にあるような「口誦言語から書記言語へ」といった、文学研究のタームとしてではない。言語表現の、〈書く〉ことの、より情動的な課題として、それはあつた。現実的な行動が封じこめられていく情況のなかで、〈書く〉ことが、〈書かれた言葉〉が革命への現実性であるという主張にたいして、革命を、書かれた言葉以前の行為（の共同性）として自立させることで、同時に、〈書く〉ことの固有な帯域をたしかめていくこと、いいかたをかえれば、旧来的な、つまり戦後文学派的な「政治と文学」論を超えたところで、「政治と文学」の構造を〈発生〉の問題として解き明かしたい、ということである。しかし、こんなモチーフそれ自体は、けっして「古代文学研究」たりえない。自分の中でそれを架橋したのは、文庫本ではじめて読んだ『折口信夫全集』であり、神田の古本屋で偶然手にした「古代詩論の方法試論」であつた。それは自分にとって、決定的な一つの〈転換〉であつた。

現在、他人がどう視ているかとはべつに、自分は、正面きつて「古代文学研究」の主戦場にたとうとしている。が、そのことは、自分の中での「古代文学研究」の位置関係に、なんらかの変化が生じていることでもありうる。あらかじめ自分の内部にあつたものではないのに、あたかもそれが自明のように存在していく、いいかえれば、もろもろの古典文学の作品を研究の前提として受け入れてい

くというように、だ。それは、一面からは「発生」論というモチーフの撤回であり、また一面からは「発生」論から「作品」論への発展・展開というようにもみえる。もちろん、「私」の個人的な問題ではない。古代文学研究における「発生」論と「作品」論との関係・構造・回路をどうあつかうか、という普遍的な課題としてである。

文学の発生を、「書く」ことの発生とおさえれば、無文字の口誦表現↓文字の漢語としての輸入↓口誦の和語とのかっとう↓「書く」ことへといった、歴史上のある一点における一回的な出来事だといえる。表出された言葉のみで完結せず、その発せられた場である祭祀空間や、村落共同体の幻想の共同性に支えられた無文字の言語世界から、「書く」ことは、文字として外化された言語空間の内側で、それ自体として完結する「作品」をもたらした。文学としての文学の「発生」論は、まさにそのことの解明である。しかし、古代（前近代）において、いったん「書く」こととして確立した文学表現は、もはや無文字のウタ・カタリ・ハナシといった表現から無縁に、「作品」として自律的な構造を有し、展開していくのだからか。たとえば、七六〇年成立と推定される、藤原武智麻呂という律令官人の生涯を記述した「武智麻呂伝」という文献がある。これを一つの「作品」として読んでみる。ここで武智麻呂の生涯は、正六位上、内舍人をはじめに、左大臣までの律令官人としての「任官」を軸に編年体として構成され、任命されたどの官職においても、まさに律令官人としての理想的な典型として描かれている。そして任官の記述の間に、「昔、倭武皇子」が敗れた「伊福山」の「鬼神」

にたいする武智麻呂の、「徳行神を感かして」といった「伝承」を基盤とした叙述をいくつか挿入し、日本的律令制の二重構造を表現している。いわば、「新に律令を制りて、国の人を斉整ふ」にあたっての、律令官吏の理想像はどうあるべきかのモデルを、「武智麻呂」という人物にあてはめたのだ。「武智麻呂伝」は、古代律令制国家の新たな「始祖神話」だといえる。それは、まさに「書く」こととの概念化・抽象によつてはたされた。しかし、書かれた「武智麻呂伝」はなぜ「物語」たりえないのか。このことは、いわゆる物語言語が、ウタ・カタリ・ハナシといった無文字の表現を、「書く」ことが方法化（様式化）することで獲得された、新しい言語水準であることを逆照射するように思われる。

〔武智麻呂伝〕に関しては、古代土曜会・清水章雄氏の報告（'80・10・18）を参考）